

# 一九三〇年代の佐賀における「葉隠」の顕彰と学校教育

——「葉隠」をめぐる「記憶の場」と「教育の場」——

谷口眞子

## はじめに

前近代から近代に至る武士道論の歴史を考察するためには、武士道を論じた作品の意図・時代背景・内容と、それが後世に受容された過程・その際の文脈の両方を分析する必要がある。

享保二（一七一七）年に山本常朝と田代陣基が編纂した「葉隠」もまた、田代が山本を訪ねた理由、二人が共に経験していた御側仕えという役職の性格、当時の主従関係など、その言葉が発せられた背景を知ってはじめて、編纂当時の意図・真意がわかり、その後の受容の歴史に表象された意味も明らかになる。

「葉隠」は聞書（一）聞書（二）から構成されているが、従来は聞書（一）（二）を主な検討対象とし、そこから武士としての修養の精神を読み取るのが一般的だった。しかし、拙稿「没我的忠誠論の再検討——『葉隠』新解釈の試み——」<sup>(1)</sup>で考察したように、聞書（一）（二）は

いた主君の死後、出家していた山本常朝が、役職を罷免され悲嘆にくれていた、一九歳年下の田代陣基に対し、御側仕えとしての覚悟を伝えた文言を収録したものである。「主君から浪人や切腹を命じられても奉公の一つと思え」「四六時中、主君のことだけを考えよ」という表現は、主君に対して没我的忠誠を求めたように聞こえるが、

これは、それほど覚悟がなければ、わがままに育った主君の御側仕えとしてその過ちをただし、時には異見し、教育することはできないという山本の叱咤激励の言葉だった。彼は、歴代藩主・家臣の事績や佐賀藩の慣習などの知識（「国学」）が、治政に必要な不可欠であるとし、関連史料の収集も田代にすすめた。それが聞書三以降の部分である。「葉隠」は元來、主従関係の絶対性や盲目的忠誠を主張した、修養書ではなかった。

「葉隠」が活字の抄録本で出版されたのは明治三九（一九〇六）年、全集が出版されたのは大正五（一九一六）年である。拙稿「読み替えられた『葉隠』——その刊行と受容の歴史——」<sup>(2)</sup>では、出版史の観点

から次の二点に留意して考察した。第一は題字や序文を寄せた人物、出版に関係した人物の社会的地位や人間関係を分析して、編者がどのような権威を借りながら出版しようとしたのかを明らかにすること、第二は、出版のきっかけや出版時の社会的・思想的状況との関係を考慮することである。抄録本は日露戦争が終わった直後、全集本は第一次世界大戦中に刊行され、出版には当時の社会情勢や政治家の意向などが関係していた。編集者が軍人や政治家を引き込むことで、「葉隠」を権威づけようとした面もあった。最初の抄録本が、日露戦争後の道徳的精神的弛緩の中で、修養の書として出されたのは興味深い。

「葉隠」が一般的に知られるようになったのは、昭和に入ってからのことである。昭和七（一九三二）年一月～三月、佐賀出身軍人のめざましい活躍により、「葉隠」が注目されるようになった。彼らの行動を支えたのが葉隠精神であり、それが日本精神・大和魂の精髓であるとして、「葉隠」は読み替えられていくことになる。本稿では、一九三〇年代の佐賀において、「葉隠」が佐賀に対する郷土愛（パトリオティズム）とどのように関連しながら、言説化されていくようになるのか、その過程を「記憶の場」と「教育の場」から検討したい。<sup>(3)</sup>

## 第一章 肥前史談会と葉隠研究会の活動

### 第一節 肥前史談会と葉隠研究会の設立

名君として知られる一〇代藩主鍋島直正の生誕一〇〇年にあたる大正二（一九一三）年、大隈重信を委員長とする委員会が組織され、県内外からの寄付金により、高さ四メートルを超える直正の銅像が建設された。これに対し、佐賀藩最後の藩主をつとめた一一代の侯爵鍋島直大は、銅像除幕式の日、銅像近くに佐賀図書館を落成して、県民への謝意を表した。<sup>(4)</sup> また大正四年一月には、大正天皇の即位にともなう叙位・叙勲により、山本常朝に思想的な影響を与えた石田一鼎が正五位を与えられ、それを記念して中村郁一編『鍋島論語葉隠全集』初版が、大正五年一月に刊行されている。このような動きとの関連は定かではないが、肥前史談会が大正五年三月に結成された。その目的は肥前の歴史を研究し、社会や国家に貢献した佐賀の偉人の功績を伝え、名勝旧跡や天然記念物を保存し、郷土関係の古文書や古記録を刊行することであった。<sup>(5)</sup> しかし、史談会の活動は二年ほどで中絶してしまった。

大正一四年一二月に再興の動きがでて、肥前史談会は大正一五（一九二六）年一月に第一回会合を佐賀図書館で開催した。肥前史談会主幹の西村謙三は、佐賀図書館館長だった。史料蒐集部、史蹟調査部、雑誌編集部、図書刊行部、講演部がもうけられ、講演会は

毎月一回、史蹟巡礼も毎年数回行われた。機関誌の『肥前史談』は、第一巻第一号が昭和二（一九二七）年一月に発行され、以後毎月一冊のペースで刊行された。昭和五年には佐賀県知事より、その功績が顕著であるとして金五〇〇円が渡され、表彰されている。昭和一年一月時点で会員は五〇〇余名にのぼり、佐賀県のみならず九州各地、東京、大阪、京都、北海道、朝鮮、台湾、満州にも及んでいた。<sup>6</sup>『肥前史談』には、郷土史研究に関する論考や講演・行事の記録などが掲載されており、葉隠関連記事は佐賀における動向を知るのに有益である。

鍋島家が運営していた佐賀図書館は、昭和四年に佐賀県へ移管され、県立佐賀図書館が発起人となって翌年七月に設立されたのが、葉隠研究会である。設立趣意書には、①葉隠は儒仏両道を融和した武士道の經典であり、②維新前後に佐賀から輩出された逸材は葉隠精神の発露といえることができ、③葉隠の骨子たる四誓願は警世憂国の表現であるにもかかわらず、④葉隠は封建時代の遺物であり、昭和の時代には不適合とする誤解もあることから、道義觀念の挽回と人心の覚醒に資するため、郷土の誇りたる葉隠の研究会を設立したとみえる。<sup>7</sup>

第一回葉隠研究会の講演は昭和五年九月一日、県立佐賀図書館の主催で開かれた。講演者の栗原荒野は、「葉隠」成立は石田一鼎によるところが大きいとし、一鼎と七歳年上の山鹿素行とは、時代や境遇、風格が似ており、「東に素行あり西に一鼎ありの観があつ

たであろう」と評価している。また山本常朝が仕えていた二代藩主鍋島光茂による殉死禁止を認めながら、他方で、光茂の父で家督相続前に亡くなった鍋島忠直の家臣江副金兵衛が、高野山にこもって主君の冥福を祈りつつその木像を彫り、一周忌に殉死したことも評価している。<sup>8</sup>ただし、佐賀では「葉隠」とともに楠木正成父子への尊敬も深かった。葉隠研究会が設立された昭和五年七月に、佐賀楠公会は佐賀市公会堂で講演会を開催し、聴衆は一五〇〇人を超えたという。ここでは精神作興の詔書（後述）を奉読したのち、伊勢神宮、皇室遙拜、国歌合唱を経て、前学習院教授眞崎誠氏が、学習院長時代の乃木希典の一言一行に感動したという講演をした。<sup>9</sup>肥前史談会は、昭和六年一月から図書館で毎月一回、一卷ずつ「葉隠」を輪読すると並行して、昭和七年五月から葉隠講座を開設した。

こうした、会としての活動のほか、個人でも葉隠思想の普及を目指す動きがみられた。松原神社宮司の鶴清気は師範学校の依頼を受け、すでに昭和四年に県下小学校校長講習会で五回にわたり葉隠の講話を行い、昭和五年に『鍋島論語葉隠概論』を刊行していた。<sup>10</sup>佐賀県学務部長鈴木省吾はその本の序文で、佐賀県は精神教育を教育綱領の冒頭におき、県下校長講習会を開催し、一般県民に葉隠思想を鼓吹し、時弊を矯正しようとして鶴清気に講演を依頼したと書いている。今一人、序文をよめた佐賀県立図書館長吉田弟彦は、「葉隠」を「何れの時代に於ても、適応し、時代思想と渾然融和し、世道人心を提擲指導する、一個の經典である」と評した。<sup>11</sup>同じく昭和

五年には、中村郁一編『鍋島論語葉隠全集』第三版も出版された。

宣伝文句には、「佐賀武士道の聖典 英国の紳士道にも劣らざる武士のたしなみ 鍋島男子の意気は本書によつて窺ふべし」とみえる。<sup>12</sup>

中村郁一は抄録本第二版から、「鍋島論語」という表現を使い続けているが、鶴清気は書名では「鍋島論語」としているものの、本文では「肥前論語」と表現している。鍋島は領主の姓氏を指し、肥前は地理的領域を指す。その意味で「肥前論語」は、領主との主従関係にもとづく武士の世界の精神としてではなく、肥前という地域に根ざした精神であると主張していることになろう。

大正後期には日本社会全般に享樂的退廢的雰囲気が広がり、関東大震災による人心の動揺も激しかった。大正二二（一九二三）年一月一〇日に、国民精神作興に関する詔書が發布され、「浮華放縱ノ習」「輕佻詭激ノ風」を戒め、質実剛健・醇厚中正に立ち帰り、協力して国民精神の振興と国家興隆をはかることが説かれた。その翌日、徳育による人格形成、忠君愛国思想による一致協力、国力發展をはかるべき旨の告諭が出された。そのような動きを受けて、佐賀県は葉隠精神・葉隠思想を県民教育の根底にすえようとしたのであった。

## 第二節 佐賀出身の軍人の活躍と葉隠への関心

池田賢士郎氏がすでに指摘しているように、「葉隠」を有名にしたのは、ジャーナリズムにより報道された、満州事変・上海事変に

おける佐賀出身軍人の相次ぐ「活躍」だった。昭和七年一月九日、佐賀郡北川副村出身の古賀伝太郎連隊長が、遼東半島対岸の錦西（チンシー）付近で戦死した。二月二二日には、上海近郊の廟行鎮で「爆弾三勇士」が戦死した。佐賀県神埼郡蓮池村出身の江下武二一等兵が他の二人とともに、敵の鉄条網を破壊するため、体に爆弾を巻き付けてそれに点火したという。さらに三月には佐賀市水ヶ江町出身の空閑昇少佐が、上海近郊の江湾鎮で戦傷により人事不省に陥り、中国軍から送還されたことを恥じて自決した。ジャーナリズムは「生きて虜囚の辱めを受けず」ともてはやし、芝居まで上演されたらしい。<sup>13</sup>

三人の活躍については、「葉隠精神の発露 壮烈鬼神を泣かしむ」というタイトルで、『肥前史談』でもとりあげられ、「世界の戦史上にも見ざる比類なき行為であり皇軍の士気を鼓舞し国民の精神作興に大なる衝動を与ふることは云ふ迄もない」と記している。<sup>14</sup>ほかに、曹洞宗布教師八谷大麟が葉隠餅一万个を携えて、満蒙派遣軍将士慰問を行ったことが紹介され、出征勇士の武勲を顕彰すべく、武勲録を編纂して青年団や小中学校生徒らに配布する計画がある、ともみえる。

世間を興奮の渦に巻き込んだ軍人の活躍は、佐賀における葉隠研究と普及活動を促した。西村謙三は昭和七年六月、熊本放送局の依頼により、葉隠講話をラジオの全国放送で流した。佐賀市教育課主催で、青年に葉隠思想を紹介する講演会では、栗原荒野、鶴清気、

吉田弟彦、濱野素次郎の四人が演台に立った。昭和七年夏の文部省主催全国中等学校教員の国漢文夏期講習会では、佐賀高等学校で栗原が課外講演で「葉隠」をとりあげている。また栗原は佐賀商業学校、西村は成美高等女学校、吉田は鹿島高等女学校で講演をした。栗原は佐賀県警察官全員に配布される雑誌「警友」に、毎号「葉隠」についての記事を執筆している。<sup>15</sup>久保大来（源六）―『肥前史談』編集者で当時は佐賀図書館司書―は『輝く武勲と葉隠精神』という手引き書を佐賀市の大坪書店から刊行した。<sup>16</sup>

こうして、「葉隠」は佐賀の郷土愛の礎として喧伝され、また意識されていくようになる。その結果、葉隠関係者の慰霊祭や記念碑建立により、葉隠精神が目に見える形で顕彰されるに至る。

## 第二章 葉隠の顕彰―慰霊祭と記念碑建立の動き

### 第一節 葉隠三哲慰霊祭と記念展覧会の開催

昭和七（一九三二）年一月二〇日、石田一鼎、山本常朝、田代陣基の三人の功績をたたえるため、肥前史談会主催で葉隠三哲慰霊祭が、佐賀市公会堂で開催された。この時点では山本常朝の庵があったところはすさんでおり、大きな柿の木が一本あっただけのものである。慰霊祭には小学校校長、中学校校長、佐賀地方裁判所長など約二〇〇人が参加した。松原神社宮司の斎主鶴清氣が祝詞を奏上し、祭主の史談会会長西村謙三が祭文を朗読した。

次に鍋島侯爵代理、県知事、県会議長、佐賀市長、佐賀県教育会長などから祝辞があり、三人の遺徳を礼賛した和歌・漢詩・俳句が披露され、祝電も紹介された。祝電は鍋島一族のほか、子爵小笠原長生や貴族院議員武富時敏、大隈重信の養子大隈信常、京城在住の中村郁一などから送られている。その後、玉串奉奠、昇神式を経て、佐賀図書館長吉田弟彦が「葉隠精神と其普及」と題する講演を行った。講演後には、「葉隠羊羹」と「葉隠解説」が配布された。以上が、慰霊祭の式次第である。

西村は、「葉隠」にみえる「忠孝仁義の四誓願を以て全国皆兵主義の七千万同胞の修養たらしめば、其結果として我帝国に精神上の武装的平和を確立し、世界を挙げて我正義の主張に耳を傾けしむるに至るも難事にあらざるべし」と述べ、吉田は葉隠精神の心が「忠なり義となつて、国も君も家も立つて行き親に孝行も出来る」と講演し、ともに「葉隠」の現代的意義を高らかに宣言した。

「葉隠」を、過去の遺産ではなく現代に活かそうとする考えは、祝辞でもふれられている。佐賀県知事早川三郎は、大難に遭遇したらむしる欣喜雀躍して進むべきである、という「葉隠」の教訓に言及し、その「気概と勇猛心を以て愈々葉隠の眞精神を發揮し、以て献身奉公君国に尽し一は三哲の霊を慰め、一は史談会の此の挙を意義あらしめん」と述べた。佐賀県会議長の野口勘三郎は、「葉隠」が「慈悲の重んずべきを説いて人格的修養の完璧を誨へ、日常一些事に属する事まで卑近な事例をあげて或は之を論し或は之を戒むる

等、現代の最も進歩したる社会道徳界に於てその儘に之を実践躬行すべき教訓を遺したるが如き、実に驚嘆すべき偉大なる修身書であり、社会道徳の規範でもある。「忠勇義烈質實剛健にして而も謙讓温和の純情に富んだ新しき意味に於ける眞の県民性の確立を期す」としてゐる。

「葉隠」が編纂されたのは慰霊祭より二〇〇年以上前である。當時は幕藩体制であり、昭和の時代とは政治体制が根本的に異なる。しかし、職を失った田代を励ました山本の言葉は、精神論を説いた内容だったため、具体的な人物の行動や事績にもとづく聞書三以降とは異なり、抽象度が高かった。むしろ歴史的事実と乖離していたがゆえに、そこに時代を超えた意味が見いだされたのである。彼らは人格的修養のための修身書として、「葉隠」を位置づけた。そしてそれによる県民性の確立も期待したのである。

さらに慰霊祭と併行して、記念展覧会も開かれた。祭典当日の一月二〇日正午〜午後六時まで徴古館内で、「葉隠」の写本、古記録類、三哲の著述のほか葉隠関連の文献など、葉隠研究の資料が陳列された。昭和二年に開館した徴古館は、一二代鍋島直映の創建によるもので、温故知新を目的とし、郷土文化の淵源たる遺物を蒐集陳列する施設であった。

「葉隠」の写本を出品したのは、鍋島侯爵家内庫所、佐賀図書館、徴古館ほか、濱野素次郎―昭和一三年に『葉隠精神と教育』を出版する小学校校長―ら個人である。「用」「要」「鑑抄」を提出した千住

武次郎は、肥前史談会の評議員である。中村郁一は自身が編集した、「葉隠」の抄録本（初版・第二版）と全集本（初版・第二版）、校訂にあたった『武士道の経典 葉隠の祖述者 山本常朝先生』を出品している。

鍋島家は「葉隠」を史料として引用した「直茂公譜考補」「光茂公譜考補」や、常朝が言及し全集にも収録されている、初代藩主鍋島直茂制定の「御壁書二十一ヶ條其他」などを出品した。徴古館が提出した「愚見集」と「山本神右衛門常朝年譜」は、常朝の子孫である山本助一が、徴古館に寄贈したものである。「愚見集」は、山本常朝が「葉隠」より以前に自分の考えを養子に伝えたもので、葉隠全集には「山本秘書」として収録されている。

興味深いのは、空閑少佐愛読書として、遺族である空閑正尚が「葉隠」を出品していることである。これは赤鉛筆で傍線が引いてある抄録本であった。また栗原荒野は、この愛読抄録本から、線が引かれた部分をまとめ、古写本と照合して「空閑少佐愛読葉隠章句写」を提出している。<sup>17</sup>

常朝の四誓願は、「武士道に於ては後れを取り申間敷事」「主君の御用に立つ可き事」「親へ孝行仕る可き事」「大慈悲を起こし人の為になる可き事」の四つを指し、このうち最初の三つは石田一鼎の「武士道要鑑抄」の三綱領、最後の慈悲は湛然和尚の教えによると言われている。しかし、この慰霊祭に湛然和尚は含まれていなかった。そこで湛然和尚にも光があてられることになる。

## 第二節 葉隠関係者のさらなる顕彰

葉隠三哲慰霊祭から約一年半後の昭和九（一九三四）年四月、福田晴鴻編『葉隠と湛然大和尚 附信溪先生小伝』が発行された。非売品で、発行者は木塚嘉一郎―四年後に田代陣基の墓を発見する人物―であった。晴鴻は、葉隠三哲慰霊祭で接待係をつとめた福田慶四郎のことである。福田の自序によれば、湛然和尚の隠棲地華藏庵にはお堂もなく、土地は人手に渡り、境内は草木が繁茂し、その名も忘れられていたため、有志で敷地を回収して五輪塔を建て、碑文を刻み、除幕式を行ったとある。西村謙三による華藏庵碑文には、常朝が湛然和尚から非常に感化されたとして、「和尚が忠と孝とを肩荷とし勇氣と慈悲とを肩荷とし二六時中肩の割り込む程荷ひ居るべし、朝夕の礼拝にも行住坐臥にも殿様々々と唱ふべし心の落付き仏名眞言と異なるなしと教へたる警句は恐らくは常朝の心魂に喰ひ入り、彼れが葉隠主義の根幹をなせるなるべし」と刻まれている。<sup>18)</sup>

福田慶四郎は、常朝の思想は石田一鼎よりも、祖父中野清明の大勇や不屈不撓の忠誠、父山本重澄の常住不変の誠実の考え方の影響を受けていると述べている。特に父重澄は隠居後、鍋島家先祖の墓参を欠かさず、孫を湛然和尚の弟子とした。このような祖父と父の「純忠」の精神が常朝に遺伝したのだという。三誓願は石田一鼎によるが、それは形式道徳の次元であり、内的実践道徳は祖父と父の行動によるところが大きいというのが、福田の考えである。実際、隠居した父に伴われて常朝は湛然和尚に接し、二一歳の時には和尚

から血脈を授かっている。

附録には深江信溪の小伝がついている。これは、円蔵院の和尚を死刑にした二代佐賀藩主鍋島光茂に対して、湛然和尚が鍋島家菩提寺の高伝寺を出て、信溪の通天庵に入り抵抗したため、光茂が通天庵近くの佐賀郡松瀬村に華藏庵を建てた由来にもとづく。碑文では、主君に対する異見と抵抗、それによる隠棲を貫いたことが評価されている。湛然和尚の生き方が、主君への真の忠誠として諫言を重視する、山本の考え方に反映されていることは明らかである。

華藏庵顕彰の翌年、今度は金立村黒土原の山本常朝草庵址に、常朝の子孫山本助一が葉隠垂訓碑を建立し、昭和一〇年一〇月六日、除幕式と記念祝賀会が行われた。「常朝先生垂訓碑」の文字は、貴族院議員で元蔵相・通相の武富時敏の揮毫、碑文は当時徴古館長をつとめていた西村謙三の選による。西村は「奉公ノ大道ハ小我ヲ捨テ、大我ニ殉スルニ在リ、葉隠の「四誓願モ武士道トハ死ヌル事ト見附ケタリトノ警句モ畢竟我ガ身ハ大我ノ一細胞タリトノ義ヲ端的ニ道破シタルニ過ギザルナリ」と記した。式には山本助一のほか佐賀県知事、鍋島侯爵代理、田代陣基の子孫である井上一松をはじめ、肥前史談会会員、議員、地元有志、小学児童など約五〇〇余名が参加したという。

鍋島直映侯爵（病気のため式には欠席）は祝辞で、一死報恩の誠を致すことを日本精神と呼ぶが、佐賀ではそれを葉隠精神と呼んでいると述べ、碑石の靈力により江下伍長、古賀連隊長、空閑少佐の

ような真武人が輩出されることを切望する、と締めくくっている。

また佐賀県知事の古川静夫は、率直・真実・勇猛果敢の実行力を強調し、諸人が一和協力して大慈悲を念願し、犠牲的精神によって国家社会のために貢献すべきとする葉隠精神は、現代的国民生活の指導原理にして、日本精神の精髓と本質を同じくする、と述べ、日常生活に活用すれば精神の修養、身体の鍛錬、団体生活の向上、教育の振興、産業の発達に裨益するところ大としている。除幕式にあたって詠まれた歌にも、「いや広にひろめひろめて国民の道としてまく葉隠の道」などがみられる。<sup>(19)</sup>

さらに山本常朝垂訓碑建設の三年後にあたる昭和一三（一九三八）年七月三日、木塚嘉一郎が偶然、瑞龍庵境内で田代陣墓の墓碑を発見した。それを受けて昭和一四年四月五日―陣墓の祥月命日に、瑞龍庵で田代陣墓の墓前祭がはじめて行われた。佐賀県知事、佐賀高校校長、鍋島侯爵家家扶、徴古館長、田代陣墓の子孫田代博や親族など、一二〇余名が参列し、本堂で「陣墓先生百九十二年追悼法要」が執行された。県知事の小山知一は、「総真剣総努力総親和を強調すること最も著しき葉隠精神を顕現し大和魂の精華を注ぎするは正に此の時にあり、郷党の人士脈々たる伝統の熱血を注ぎ各々其の職務に励精して万民輔翼の赤誠を致さば非常時国家の為に寄与する所大なるものあるべし」と挨拶した。<sup>(20)</sup> なおこの法要の前には、「葉隠」の抄録本、全集本を出版し続け、華藏庵の碑にも寄付者として名前を連ねていた、京城市居住の中村郁一が建設した記念

碑除幕式が行われた。

中村は田代陣墓の記念碑の次に、山本常朝の記念碑も建てた。昭和一六年一〇月一〇日、常朝の墓がある佐賀の龍雲寺境内に「山本常朝先生葉隠祖述記念之碑」を建立したのである。記念碑に刻まれた文章は、中島吉郎遺稿・中村郁一修補『武士道の経典 葉隠の祖述者 山本常朝先生』（昭和七年九月の初版を昭和一六年一〇月一〇日に再版。非売品で限定二〇〇部）に収められた。中村は除幕式に際して、絶版となっていた本書を再版し、そこに碑文も掲載したのである。「葉隠」は武士道の経典として、明治末よりその真価が認識されはじめ、昭和一六年段階では帝国臣民の精神修養の資になった、とある。

以上のような顕彰や碑文建設は、葉隠行軍のルートにも反映されている。葉隠行軍は、青年を中心とし、心身鍛錬のために葉隠関係の史蹟を巡礼するもので、昭和八年一月二三日の新嘗祭に第一回行軍が実施された。爆弾三勇士の翌年からということになる。以後、毎年一月二三日を葉隠行軍日と定め、年中行事として行われた。昭和一〇年一月の第三回葉隠行軍の場合、佐賀市の男女青年団二〇〇余名、後述する勸興小学校の生徒二〇〇余名、一般有志、学校職員、中等学生など、参加者は四五〇〜六〇名に及んだ。行軍記によると、次のようなルートをたどっている。

午前六時に佐嘉神社に集合して拝殿で礼拝し、松原神社に参拝。この年に建てられた山本常朝先生草庵址垂訓碑に行き、説明を受け

ながら休憩する。古賀穀堂の旧宅静古館址を訪れ、松梅村下田の石田一鼎墓所に参拝し、一鼎について説明を受ける。ここで女子青年団と小学生は引き返し、男子青年団と大人七〇〜八〇名が、深江信溪の墓がある通天寺で昼食をとる。その後、少し離れた華蔵庵址にある湛然和尚の墓に詣で、淀姫神社でしばし休憩したあと、成富兵庫助が築いた石閘をみる。そして佐賀高等小学校に入り、知事から出された芋粥を食べながら座談会を開く。全行程は約九里七町であった。<sup>(21)</sup>昭和十三年一月の第六回葉隠行軍では、その年に発見された瑞龍庵にある田代陣墓の墓にも詣でている。<sup>(22)</sup>

葉隠行軍に、肥前史談会会員や関係者のみならず、小学生や青年団、学校職員らが参加していることは注目される。歴史愛好者による同好会的な活動ではなく、佐賀の歴史を実地で学ぶ場であり、同時に心身の訓練の場でもあったのである。葉隠関係者以外の他の史跡もめぐっており、郷土史の中で「葉隠」をとりあげていることがわかる。そこで次に、佐賀の葉隠研究とその普及に尽力した栗原荒野を紹介し、「葉隠」が教育現場でどのように扱われたのか、その実態を考察したい。

### 第三章 栗原荒野の研究と葉隠教育

#### 第一節 栗原荒野の葉隠研究

栗原は明治一九（一八八六）年に、松浦郡浜崎村野田（現在の唐

津市浜玉町）で生まれた。明治四三年に明治学院神学部を卒業し、唐津の西海新聞（のち唐津日日新聞）を経て、四五年に佐賀毎日新聞に入社する。その後、大阪毎日新聞で勤務し、昭和一〇年に退社したあと、佐賀県史編纂事務取扱嘱託となり、葉隠研究に没頭した。<sup>(23)</sup>

栗原は、輪読会で中村郁一編集の葉隠本を使用していたが、用いた写本が明らかではなく、読みやすくするため原文に手が入っていたことに不満を覚え、研究をはじめたという。輪読会は昭和六年一月から県立佐賀図書館で行われており、栗原はその翌年に葉隠講座で発表もしているから、爆弾三勇士や空閑少佐の活躍以前から「葉隠」に興味を持っていたことがわかる。栗原は維新後、山本家から鍋島家に献上したとされる山本本と、山本や田代とも交流があったという蒲原孝白筆写の孝白本を底本とし、「葉隠聞書校補」などの藩政史料も参照して、昭和一〇（一九三五）年に『分類註釈葉隠の神髄』を刊行した。

本書は本文のほかに、藤岡知事と西村謙三の序文、中島哀浪の題歌、武富時敏と陸軍大将真崎甚三郎の揮毫、自作の長歌と短歌から構成されている。本文は一三〇〇余りの箇条から、七四一箇条を選び、これを四誓願、一般修養、実話逸事、史蹟伝説の四編に分け、その各編を武士道、忠節、孝行、慈悲の四節で構成した。「直茂公御壁書」「要鑑抄」「愚見集」「餞別」「常朝書置」、龍造寺氏・鍋島氏と一門の「諸家略系図」を付録とし、巻末には「註釈索引」(語句・人名・地名)が付いている。装丁は佐賀美術協会会長の山口亮一、

出版は佐賀市の佐賀印刷所である。四六判、約六〇〇頁で定価三円にもかわらず、数ヶ月で三版になった。<sup>(24)</sup>

荒野は解説で、「葉隠の神髓とする根本精神は一言にして之を言えは『まこと』であり、『まこと』の縦の表現である『忠』と横の表現である『和』にある」と述べている。「忠」というとすぐに「忠義」という言葉が思い浮かぶが、「忠」はそもそも「まこと」という意味であった。したがって忠誠は忠実で正直な心である。その心を以て自己以外の世界と接するとき、和が生まれる。<sup>(25)</sup> また栗原は、「葉隠全巻に横溢してゐる武勇の観念も、単なる武勇のための武勇でなく、その他の孝行も慈悲も、悉く主君に対する忠誠の一要素としての徳行である」とし、さらに「葉隠」の「殿様中心と諸人一和」は「皇室中心と挙国一致」、「国学心懸くべき事」は「日本の国史を尊重し、建国の精神にかえれ」、「葉隠魂」は「大和魂」に該当すると説明した。

ここには、江戸時代の幕藩体制のもとで山本常朝が語った奉公の精神が、当時の時代状況を背景に、どのように読みかえられていったのか、その一端がかいまみえる。幕藩体制下では、將軍と藩主が主従関係にあり、その藩主と主従関係を結んでいるのが藩士である。ときには藩主の勘気を蒙り、藩士が改易される可能性もあった。その中で「殿様中心と諸人一和」というとき、そこには、藩主が減封・改易されることがないように、藩主を中心に藩士が力を合わせて大名家を盛り立て、大名と家臣の家を存続させていくという意味が含

まれていた。しかしこれを、「皇室中心と挙国一致」に読みかえるとき、挙国一致には「国民の集合体」が含意される。そこでは、「四民平等」となった国民という横並びの存在が、天皇という君主を中心に一丸となるので、形式的には天皇の求心力は、江戸時代の將軍よりも強いことになる。「国学心懸くべき事」についても、佐賀藩歴代の藩主やその統治の歴史、土地の慣習などを学ぶ学問としての「国学」を、主君は学ぶべきであると山本常朝は考えたのだが、本居宣長らの国学と混合され、「日本の国史を尊重し、建国の精神にかえれ」と読みかえられている。さらに葉隠魂も古くからの大和魂、日本精神の表現として、解釈替えされるに至るのである。

『分類註釈 葉隠の神髓』刊行の三年後にあたる昭和十三年、栗原は東京中央放送局のプログラムにより、福岡放送局から全国中継で二〇分間にわたり「葉隠」について講演した。放送日の二月十三日は、国民精神総動員第二回強調週間三日目で、題目は「葉隠論語と武士道」である。「葉隠」の四誓願は「忠孝一本、慈武一如」の八文字で表現できるとし、「葉隠」の標語「真剣に、頑張れ、仲好く」は、国民精神総動員の標語である「尽忠報国、挙国一致、堅忍持久」の精神に一致すると主張した。<sup>(26)</sup>

栗原はさらに昭和十五年、葉隠全巻を収録した校注本『校註葉隠』—文庫判で一二六〇頁余りの大冊—を、東京の内外書房から刊行した。孝白本に従い、写本通りに配列し、一字一句まで原文に忠実に収録した。箇条一三四三条に通し番号を付け、漢字にふりがなをつ

けて、原文が読めるよう工夫されている。栗原による二冊の葉隠研究はさまざまな影響を与えたが、そのひとつに佐賀での葉隠教育がある。

## 第二節 葉隠教育の実際

池田賢士郎氏によれば、昭和八年ごろ、小学校教師の古田浩太が謄写印刷の葉隠抄録を配布し、濱野素次郎が校長をつとめる勸興小学校では、父兄や卒業生の寄付により、昭和十二年五月に葉隠の碑を、大楠公（楠木正成）の像とともに校庭に建立し、生徒に毎朝遙拝させたという。<sup>27</sup>昭和一〇年の第三回葉隠行軍に、二〇〇余名の生徒を参加させた小学校であることから、葉隠教育に熱心だったことがうかがえる。昭和九年四月三日に、全国小学校教員精神作興大会が、全国代表三五〇〇人余りの参加を得て宮城前で開催され、天皇が臨幸して勅語を下賜しているので、それと連動していると考えられる。濱野は昭和一三（一九三八）年に、東京の丹丘舎から定価金二円で『葉隠精神と教育』を出版し、佐賀藩の藩校弘道館の流れをくむ勸興小学校で、実際に葉隠教育をどのように行っているか、紹介している。<sup>28</sup>

本書を開くと、佐賀県知事小山知一の題字「忠と孝とを片荷勇氣と慈悲とを片荷にし天皇陛下 天皇陛下と唱へ奉れよ」が目飛び込む。これは湛然和尚の言葉を用いた表現で、「殿様」が「天皇陛下」に入れ替えられている。校庭にある「葉隠之碑」の写真の上には、

佐賀出身の侍従長百武三郎が揮毫した四誓願が掲載されている。百武三郎は海軍大将でもあった。

佐賀県教育会長で佐賀高等学校校長の森岡喜三郎は、序文で「葉隠精神は今や天下の武士道で、日本精神と其の軌を一にし」と述べている。元宮崎県師範学校校長小林武三による和歌「我が郷土の栄ゆる基は葉隠の魂を育つる庭にこそあれ」のあと、濱野が書いた自序は、葉隠精神を教育方針の一基調とし、教育実践に生かしてきたという自負にあふれている。支那事変における将兵の活躍は、数人の兵力をもって数十倍の敵軍を撃退した超人間的神業であり、「葉隠武士は『一切は精神力で』の堅い信念のもとに節を尽くし、修養に志し、厳然たる精神王国肥前を建設」したという。

本書では、第四章まで葉隠精神を概説したあと、第五章「葉隠と現代」では戦争で活躍した佐賀出身の軍人が紹介され、第六章「葉隠と郷土教育」では「葉隠」が現代の実生活に役立ち、国民教育にも欠かせないものであると主張し、第七章「師道と葉隠」ではまず現場の教師が徳を備え、「葉隠」の学びを通じて師道を身につけなければならないと述べている。その上で第八章「学校教育と葉隠」では、勸興小学校の教育方針や葉隠教育の具体例が紹介される。以下、その実践風景をみていこう。

教師は、四誓願や物心一如の寡言実行あるいは言行一致を、魂をこめて実践しなければいけないとしている。これは、昭和六年の「教育ノ任ニ在ル者ニ下シ給ヘル勅語」に、「健全ナル国民ノ養成ハ一

二師表タル者ノ徳化ニ俟ツ」とあり、昭和九年の精神作興大会で、「吾等は至誠一貫職分を樂み身を以て範を示し、師表たるの自分を完ふせむことを期す」と誓いを立てていることに関連している。「修身は、児童のための道德的教科目であると同時に、我等の修身教科目である。共に身を修めねばならぬ」のである。

勸興小学校では、奉安殿の北に大楠公銅像を、南に葉隠之碑を建てていた。佐賀では、かつての佐賀藩主鍋島直正に対する敬意も強かったが、藩主は君主の立場にあるため、名君であつても国民と同列線上にはなりえない。その点、楠木正成・正行父子は国史教科書でも扱われ、桜井の別れは一般に知られていた。忠孝精神の体現者として適当だったのである。楠木正成は、「一忠臣としてでなく、三千年来全国民の代表人物として即ち日本精神の具現者として」とらえられている。

一方、葉隠之碑は「葉隠精神の具体化」として建てられた。国体明徴、教学刷新の実をあげるには、「日本精神の中核をなす忠孝精神を如実に具象化し」「形と魂との一如」の施設が必要との考えから建立に至つたという。葉隠之碑の台下には、全校生徒全員に忠孝の文字を書かせた小石を埋め込む徹底ぶりだった。

職員児童は登下校の際に、奉安殿、大楠公銅像、葉隠之碑に敬礼した。学校では毎年一月に葉隠週間をもうけ、学級別に葉隠之碑の前で、葉隠精神を顕揚した郷土の人物の事績を語り合つた。一月二〇日は、葉隠記念日で葉隠祭が催され、訓話や四誓願の朗誦、

校長が国史主任による葉隠講演が一時間ほど行われる。一月二三日には六年生が葉隠行軍に参加し、垂訓碑、石田一鼎の碑、通天庵など往復約七里を歩く。そのほか、校外教育として毎月一回、学年や季節を考慮しながら、半日か終日で往復できる範囲で史蹟を訪ねている。三年生では六月に古賀連隊長の墓参、九月に山本常朝の墓参、四年生では一二月に古賀連隊長の墓参、五年生では二月に黒土原、六年生では一二月に葉隠史蹟巡りに参加しようだ。また四年生では一〇月に空閑少佐、二月に古賀連隊長、六年生では一月と二月に葉隠の談話が行われていた。

勸興小学校で実践されている、「葉隠」を題材にした授業の例は非常に興味深い。修身と国史について、教科書の題目、葉隠題材(栗原荒野『分類註釈 葉隠の神髓』のページ番号がついている)、取り扱い上の注意が記されている。まず修身科についてみてみよう。

一年生では「葉隠」の「四誓願」のうち、第二「主君の御用に立つべき事」と第三「親に孝行仕るべき事」の読み方と大意を教えるとあり、忠孝を最初に教えていることがわかる。二年生では、何事も最後までやるのには辛抱が必要であること、三年生では親への孝行の重要性を教える一方、江副金兵衛が一周忌に追腹を切つたことについて、殉死美談として扱っている。四年生では、「葉隠」の成立と常朝の人となりを取りあげ、五年生では、仕事は一日一日片付けていくこと、真の勇気が葉隠武士の特色であることを知らしめる、とある。江副金兵衛の殉死は、現代人の「感恩報謝の誠を、上御一

人と日本国に捧ぐ」行為に該当すると説明され、「四誓願の中心は忠であるが、横を一貫する精神は誠である」と教えた。六年生では、楠木正行の忠孝と七生報国を教え、一人の善悪の行為が本人のみならず、一家全体の幸不幸と関係し、さらに祖先の名誉にもかかわると説明している。

国史科については、五年生と六年生で使われる国史教科書に沿って、葉隠題材があげられている。日本史上の人物について「葉隠」と関連させながら説明しようとしている点が特徴的である。つまり、葉隠精神は葉隠成立以前の時代から見いだせるという考え方が、教育現場に反映されているのである。

文部省『尋常小学国史 上巻』（昭和九年）<sup>(29)</sup>「第二十三 楠木正成」には、湊川合戦の場面で、正成が弟の正季に向い、最期の願いを聞くくだりがある。そのとき正季が「七度人間に生まれかはつて、あくまでも朝敵をほろぼしたい」と答え、正成も同じだと言って兄弟が差し違えて死んだ、とある部分について、「葉隠」の「蝮蛇は七度焼いても本体に返る、我は七度迄も御家の土に」を教える。つづいて「第二十五 北畠親房と楠木正行」では、正行が四條畷の戦いで死んだことについて、「実に正行のやうな人こそ、勇も仁もある、りつばな武士で、忠孝の道を全うした人といはねばならぬ」とみえるが、そこで「葉隠」の「先づ篤と身命を主人に奉り内に智仁勇の三徳を備へよ」に言及する。「第三十 上杉謙信と武田信玄」で、謙信が甲斐へ塩を送ったことについては、「葉隠」の「落ちぶれた

る者には不憫を加へ立直すやうにするが侍の義理」を引用する。文部省『尋常小学国史 下巻』（昭和十年）の「第三十三 織田信長」では、信長の粗暴な振る舞いと政治を顧みない姿勢を、家臣の平手政秀が諫めるものの聞き入れてもらえず、書き置きを残して自殺した事件が扱われているが、これについても「葉隠」の「一番乗よりも諫言が大忠節、諫言のためには一生骨が折れる」に言及する。こうして歴史上の人物の行動に、葉隠精神を見いだすことによって、その普遍性・一般性を強調しようとしたのである。

### 第三節 師範学校生による葉隠研究

これまでの考察からわかるように、「葉隠」の普及には学校関係者が深くかかわっていた。前節でみた濱野だけでなく、葉隠関係の書籍刊行には、必ず県知事などと並んで校長など学校関係者が文章を寄せているし、慰霊祭などにも参加している。学校は人間として生きていくための基礎教育を施し、地域の歴史を教える場でもあるので、教育関係者が郷土史・修身の教えとして、「葉隠」に興味をもつのは不思議ではない。むしろ「葉隠」は、江戸時代の佐賀藩とは地理的領域が異なる佐賀県の県民性を創出する媒介になったと言える。

教員を輩出するのは師範学校である。佐賀師範学校では学生が葉隠研究を行った。その成果たる『葉隠と誓願教育』からは、葉隠精神と日本精神の関係をどのように考えていたのか、師範学校を卒業

して教壇に立とうとする者たちが、いかなる使命感をもっていたのか<sup>30</sup>がうかがえる。

本書は、佐賀師範学校専攻科学生三六人が結成した葉隠研究会による論考を集めたもので、濱野素次郎『葉隠精神と教育』と同年の昭和一三（一九三八）年に発行された。自序によれば、佐賀県の教育者として郷土精神の精髓たる「葉隠」を、誓願教育として行うことが重要であるという認識のもと、編纂されたという。彼らは昭和一二年四月から栗原荒野の教示を受け、「葉隠」を教育的立場からいかにみるかという視点で論考を書いた。『葉隠と誓願教育』は総論と各論から構成され、総論は国民教育・県民教育と葉隠精神、各論は学校・教師・郷土・家庭・時局と「葉隠」との関係を扱っている。

佐賀県学務部長柳川久雄による序文は、まさに時局を反映したものであった。柳川は、「葉隠」は伝統的佐賀県民性を培った道徳の典範であり、「あらゆる徳目の根源を忠孝仁義に帰一し、これを実行するには純忠至誠、滅私奉公の犠牲的精神を以てし、不撓不屈、斃れて後も已まじの気魄を以て武士道の眞髓としてゐる」と考へる。そして「我國民以外には持ち得ない万邦無比の国体と天壤無窮の皇運とを戴き、光榮ある建国の歴史と使命の本に一致団結する大和魂の力」「皇室中心、滅私奉公、忠君愛国の、日本精神の威力」を強調する。そのほか栗原荒野、佐賀師範学校長の林礼二郎、学級主任の華岡鋭蔵も序文を書いた。

総論では師範学校の学生らしく、「葉隠」を武士道の歴史的流れの中でとらえようとしている点が注目される。「ますらおの道」は平安時代末の大陸文化の影響のため柔弱となるが、源平により始原的武士道が誕生したと考へ、平清盛の横暴不遜をたしなめた平重盛、朝廷に恭順した源頼朝、楠木正成父子、勤王の志が篤かった織田信長・豊臣秀吉、明治維新の原動力になった江戸末期の勤王の志士たち、とたどり、武士階級の問題は直接間接に一般庶民階級も感化したので、武士道は日本精神、皇国国民道と言える、とする。この流れの中で、佐賀の武士道＝肥前武士道は、絶対随順・自我没没の精神とそれにもとづく大勇猛心を指す、伝統的精神と位置づけられた。ただし、注意すべきは「自我没没」の意味である。「自己を否定し捧げ切る随順の心境はそのまま、絶対恩の自覚となり、自他の対立を超越した自然の世界に帰投するものであり、純粹な本来の姿に立ち帰る」としている。ここでいう本来の姿とは、天地に通じ、神明と一つになり、人為のさかしらを去り、ひたすら誠に立ち帰ること、神のままの道に帰るといふものである。盲従的、自己滅却ではなく、個が全体において自然の姿にあり、逆に個の中に全体の理想が顕現することを指している。これが明治天皇の詠歌「目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心の誠なりけれ」につながる。

以上のような考へ方のもとに、「葉隠」の原文が当時の時代精神から読み替えられていく。「葉隠」には次のような部分がある。①から順を追って、原文の意味と彼らの解釈を対照させながらみてい

こう。

①御代々の殿様に悪人之無く、鈍知之無く、日本の大名に二三とさがらせらるゝは終にこれ無く、②不思議の御家、御先祖様御信心の御加護たるべく候。又御国の者他方に差出されず、他方の者召入れられず、浪人仰付けられ候ても御国内に召置かれ、切腹仰付けられ候者の子孫も御国内に召置かれ、③主従の契り深き家に、不思議にも生れ出で、御被官は申すに及ばず、町人百姓迄、御譜代相伝の御深恩申し参されざる事共に候。斯様の義を存じ当り、④なにとぞ御恩報じに罷り立つべくとの覚悟に胸を極め、御懇ろに召使はるる時は愈々私なく奉公仕り、浪人切腹仰せ付けられ候も、一つの御奉公と存じ、⑤山の奥よりも、土の下よりも生々世々御家を嘆き奉る心入れ、是鍋島侍の覚悟の初門我等が骨髓にて候

①歴代藩主が大名の中でも有数の人材であったと述べられている部分で、「我が皇祖皇宗の御歴代が悉く御英明に亘らせられ、且つ御仁慈殊に御深く、我等蒼生を赤子の如く愛撫し給ひしと全く軌を一にするものである」と解釈される。

②鍋島家は先祖の信心により守られている、という部分は、「我が帝国は神国なりとの信念、皇室の御尊厳にひれ伏す国民の心、我が国独得の敬神崇祖の念」に通じる、となる。

「葉隠」の頭影と学校教育にみる郷土愛

③主従関係を大切にす鍋島家から、家中のみならず町人・百姓まで、譜代相伝の恩義を受けている、という部分は、「我が国に於ける君民同祖、君民一家の信念、我が皇国日本に生を亨けたるを無上の光栄と喜ぶ大和心と同じものである」と理解される。

④藩主からの恩に報いる覚悟をし、大切に召し使われているときはもちろん、浪人や切腹を命じられたときでもそれを一つの奉公と考える、という部分は、「藩主の深き御恩に忠誠奉公を身を以て殉ずる感恩の葉隠精神は又正しく我が大君の絶大無辺の御聖恩の忝けなさに感泣した近衛大将平重盛が身を以て忠誠を尽した感恩と其の質を同じうするものである」「恰も菅公の罪なくして左遷に遭ひ、配所の月を眺め乍らも尚ほ且つ、聖恩の広大さに毎日余香を拝した絶対尽忠の我が皇国精神と何んら変る所がない」と解釈替えされる。

⑤常に藩主家に思いをはせる心入れ、という部分は、古代に坂上田村麻呂が死してなお、皇居を警護している忠誠と一脈通じるところがある、とされる。

また「地獄にも落ちよ、神罰にも当れ、主人に志しを立つるより外はない」は、「山は裂け海はあせなん世なりとも、君に二心我あらめやも」と詠んだ源実朝の大和心や、「斯くすれば斯くなる事とは知りながら、已むに已まれぬ大和魂」で知られる、吉田松陰の大和魂と同一視されている。時代の文脈で読み替えられたことが明瞭にわかる例と言えよう。

昭和七年度県下小学校々々長会議で、「県民性の長短並びに之が助

長矯正の方法如何」という諮問案に対する県下小学校長の答申案が出されたが、彼らはその資料から、葉隠伝統の精神は県民性に堅持され脈動しつつあると考え、「七生迄も教師と生れて、教育報国をしよう」と誓うのである。

## おわりに

本稿では、一九三〇年代の佐賀における葉隠関係者の顕彰と葉隠教育の実態を考察し、佐賀への郷土愛との関係、ならびに「葉隠」の「読み」の変化について検討した。葉隠全集がすでに刊行され、肥前史談会の再興や葉隠研究会設立により、郷土史への関心があったところに起きたのが、昭和七（一九三二）年の満州事変・上海事変における佐賀出身軍人たちの活躍であった。彼らの行動により「葉隠」が注目され、同年には葉隠三哲慰霊祭や記念展覧会が開催された。翌年には葉隠行軍が始まり、昭和九年には湛然和尚の華蔵庵顕彰、一〇年には山本常朝垂訓碑建立、栗原荒野『分類註釈 葉隠の神髄』の刊行が実現する。その二年後には勸興小学校に葉隠之碑が建てられ、一三年には師範学校の学生による『葉隠と誓願教育』の刊行や田代陣基の墓前祭・記念碑建立がみられた。郷土愛にもとづいた「葉隠」への注目が、関係者の顕彰や学校教育につながり、それがまた郷土愛を醸成し、葉隠精神と日本精神・大和魂を結びつける方向へといざなったのである。

「葉隠」は社会道徳の規範、人格的修養の書とされたが、湛然和尚が顕彰された段階では、和尚が報恩の精神と慈悲心を持ちながらも、主君に異議申し立てを行い、正義・大義を貫くことに徹した生き方が、佐賀魂の権化と考えられていた。しかし、時代が降るにつれ、次第にその「読み」は変質していく。顕彰による人物や精神への注目は、「葉隠」を時代の精神から読み替えるだけでなく、過去の歴史もまたその文脈で読み替え、若い世代へ伝えることとなった。葉隠成立以前の歴史上の人物の行動に、葉隠精神をみいだすことによつてその普遍性を強調し、葉隠精神は日本精神の精髓と本質的に同じであるとされていくのである。

「葉隠」が佐賀のみならず、全国で知られるようになったのは、東京で出版された葉隠関係書によるところが大きい。地元民ではない、一般の人々の興味に配慮した、わかりやすい解説本や現代語訳本、新聞広告のキャッチフレーズなどが、葉隠精神を日本精神へ押し上げたと思される。次稿では、葉隠精神から日本精神、郷土愛から愛国心への変容について検討したい。

## 注

- (1) 谷口眞子「没我的忠誠論の再検討―『葉隠』新解釈の試み―」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五六輯（二〇一〇年度）、二〇一一年。
- (2) 谷口眞子「読み替えられた『葉隠』―その刊行と受容の歴史―」『早稲田大学高等研究所紀要』第九号（二〇一六年度）、二〇一七年。葉隠に関する研究史については、こちらを参照されたい。

- (3) 昭和七(一九三二)年の五・一五事件や、昭和一一(一九三六)年の二・二六事件には佐賀出身者が含まれていたが、葉隠関係の本でこれらの事件にふれたものはほとんどない。
- (4) 図録『生誕二〇〇年記念展 鍋島直正公』(公益財団法人鍋島報効会、二〇一四年)。
- (5) 「史談会創立から今日まで二十年間の回顧」『肥前史談』第七卷一、二号(一九三五年)。
- (6) 前掲「史談会創立から今日まで二十年間の回顧」。
- (7) 「雑録」『肥前史談』第三卷八号(一九三〇年)。
- (8) 「葉隠の成立に関する考察」『肥前史談』第三卷一〇号(一九三〇年)。
- (9) 「雑録」『肥前史談』第三卷八号(一九三〇年)。
- (10) 昭和七年一月二〇日開催の葉隠三哲慰霊祭における、佐賀図書館館長吉田弟彦の講演。『肥前史談』第六卷一、二号(一九三三年)。
- (11) 鶴清氣編『鍋島論語葉隠概論』(平井書店、一九三〇年)。
- (12) 「肥前史談」第三卷一〇号(一九三〇年)に掲載された葉隠関係書籍の宣伝。
- (13) 池田賢士郎「近代の葉隠―その足どり 前編」『葉隠研究』七六号(二〇一四年)。
- (14) 「肥前史談」第五卷三号(一九三三年)。
- (15) 「肥前史談」第六卷一、二号(一九三三年)。
- (16) 池田賢士郎「近代の葉隠―その足どり 後編」『葉隠研究』七七号(二〇一四年)。以下「池田賢士郎 後編」と略す。
- (17) 以上、「肥前史談」第六卷一、二号(一九三三年)。
- (18) 福田晴鴻編『葉隠と湛然大和尚 附信溪先生小伝』(非売品、一九三四年)。
- (19) 「永に輝く葉隠垂訓碑」『肥前史談』第八卷一〇号(一九三五年)、山本助一「山本常朝草庵趾記念碑建設微意」『肥前史談』第八卷一、二号(一九三五年)。

「葉隠」の顕彰と学校教育にみる郷土愛

- (20) 「総真剣総努力総親和」は、「葉隠」の真髄は「真剣に、頑張れ、仲良く」に集約できると述べた栗原荒野に学んだのだろう。「葉隠の纂述者田代先生墓前祭」『肥前史談』第三卷四号(一九三九年)。
- (21) 「第三回葉隠行軍」『肥前史談』第八卷一、二号(一九三五年)。
- (22) 「第六回葉隠行軍」『肥前史談』第二卷一、二号(一九三八年)。
- (23) 「池田賢士郎 後編」。
- (24) 栗原荒野「分類註釈 葉隠の神髄」(佐賀印刷所出版、一九三五年)。
- (25) 明治期の啓蒙的知識人として知られる西周は、兵部省や陸軍省など軍事畑の官僚としての顔も持つが、彼が草稿を書いた「軍人訓誡」には、忠良易直の心をもつことが軍人には肝要であるとの考えがみえる。周囲と和すことは、適当に妥協するという意味ではなく、心を尽くして話し合い、一致点を見出す行動を指す。
- (26) 栗原荒野「葉隠論語と武士道」『肥前史談』第一二卷二、三号(一九三八年)。
- (27) 「池田賢士郎 後編」。
- (28) 以下の叙述は、勤興尋常小学校校長濱野素次郎「葉隠精神と教育」(丹丘舎、一九三八年)による。
- (29) 以下、「尋常小学国史 下巻」(昭和十年)とともに「覆刻 国定歴史教科書」(大空社、一九八七年)所収を利用。
- (30) 以下の叙述は、佐賀師範学校専攻科葉隠研究会編輯「葉隠と誓願教育」(非売品、一九三八年)による。

【付記】 本研究は、平成二六年度～二八年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(研究代表者・谷口眞子)「軍史的観点からみた一八～一九世紀における名誉・忠誠・愛国心の比較研究」(研究課題番号二六二八四〇八九)による研究成果の一部である。